

## 今後求めていく教会像

### 「谷間」に置かれた人々の心を生きる教会へ

この方針は、「貧しい人の優先的遺択 (Option for the Poor)」として、世界中の教会が目指しているもので、社会正義の実現を求めることにつながっています。自由がどれほど大切なものであるかを私たちは知っていますが、他者の自由を否定するような自由の逸脱や乱用があちこちに見られます。そのような逸脱した自由の行使は、「自由の限界」を超えていますが、様々な口実のもとに公然と、他者の権利を踏みにじりながら現に行われているのです。個人の横暴という以上に、社会的、組織的、社会構造的に人間らしく生きる権利への侵害が見受けられます。そうした基本的人権を踏みにじる理不尽な有り様を是正することを、私たちは「信仰の要請」と受け止めて行動を起こしたいと思えます。

「信仰の要請」をさらに考えてみますと、神はこの「谷間」に置かれた人々を通して人類の救いのわざをなしとげることが望まれたのであり、この人々とともに新生に生きることは福音宣教の核心をなすものであること、「谷間」に置かれた人々は社会を構成する私たち一人ひとりが生み出している不正と咎を身に帯びて、私たちの回心を絶え間なく呼びかけていること、だから、「谷間」に置かれた人々を中心にした社会の仕組みをつくり出していかなければならないこと、などに気づかされます。

また、「谷間」はキリストがいらっしゃるところでもあります。弟子となるには、私たち自身がキリストのおられる場所へ出向かねばなりません。キリストに派遣されるとともに、キリストが出迎えて下さるのです。そして「谷間」に置かれた人々との出会いと交わりによる共感が、「いやし」と「喜び」を生み出し、それが周囲に溢れ出ていくことに福音宣教の本来の姿があります。

日本のキリスト教史は迫害の歴史であり、「谷間」は日本の教会の原体験です。差別と迫害の中を私たちの先祖は歩きました。太平洋戦争の時のように挫折と迷いの中で十分に主から受けた使命に応えられなかったこともありました。そうした挫折や迷いを乗り越えて、信仰の遺産を今に伝えていただいた歴史を真正面から受け止めるならば、私たちの立場がどこにあるかは明瞭となります。かつて私たちの信仰の先輩たちがそうであったように、信仰をかたくし、痛みのあるところ、悩みと苦しみのあるところにもいることを目指すのです。

日本でも世界でも数多くの人々が人間らしく生きることを阻害されています。基本的人権や生命そのものが脅かされている多くの人々がいるのです。その人々が苦しんでいることを知っているにもかかわらず、何もせずに平然としていられるならば、私たちはキリストの弟子ではあり得ません。教会の社会教説は、福音的な社会の実現に向かうための信仰者の貢献を種々の具体例を挙げて力説しています。苦しんでいる人たちと出会い、交わり、友となって、一緒にこの社会を福音的なあり方へと変革していくのです。

身近な人を大切にすることはとても大事なことです。ただし、身近であるとは、意識の距離において近いことを意味しており、アジアの別の国の人であってもアフリカに住む人であっても単なる距離の遠近が身近さの基準になるわけではありません。毎日顔を合わせる人たちのことだけを最優先にしないでと考えるのは誤りです。また、遠くの人というのが、実は家族や友人のことであってはなりません。日常の場を軽視して顧みなかったり、そこにある問題から逃避したりすることも誤りです。

生活の振り返りと識別（聖霊の導きを祈りのうちに見分けて選び取ること）を通して苦しむ人たちの友となり、隣人を愛しなさいという「愛の掟」の意味を歪めてはならないのです。

## 「交わり」の教会へ

「交わりの使徒」の生き方は私たちの課題であると述べましたが、その実現に向けて歩む教会を目指します。現状において私たちの交わりはどのような状態にあるのでしょうか。現実を確かめることから始めていきましょう。

小教区の中で信徒同士、司祭と信徒の交わりはどのようなになっていますか。各会の連携や意志の疎通は円滑ですか。洗礼志願者や新受洗者、転入者は気持ちよく受け入れられていますか。お互いに名前や家族のことを知り、生活環境を理解し合っているのでしょうか。

小教区での典礼は特に重要です。毎週のミサは共同体の要です。喜びを分かち合う実感がありますか。大きな声で賛美の歌が歌われていますか。皆が喜んで「平和のあいさつ」をしていますか。みことばと生活がつながった説教が行われていますか。公会議の精神に従ったミサ、神の民の「ともにささげる」ミサであることは、共同体となるために欠かせないことです。

神とのつながりとやすらぎを求めているのであって、人間とは関わりたくないという人もいるかもしれません。無論、ここでいう交わりとは、いつでも誰とでもベタベタと付き合うことではありません。私たちが大切にしたい「分かち合い」とは、相手に心を開くこと、相手の身に起こる様々な出来事に関心を持ち、共感する心で聴くことから始まります。各自の生活やみことばを分かち合い、さらには物心両面での分かち合いにまで至ります。生きる場を共有するところにまで分かち合いは発展していくものです。目に見える兄弟姉妹との分かち合いこそ、共同体の意味を知る原体験となります。そのような「分かち合う教会」を実現したいと願っています。

そうした交わりが現実のものとなり、共同体が真剣に信仰を深めて社会に向かって生きていくときに、次代を担う青少年に信仰が伝達されていきます。知り合って10年にもなるのに、ほとんど他人のような関係のままであったり、行事以外のことを話し合うことがなかったりする姿、お互いや主任司祭に関するうわさ話ばかりしながら、ほとんど信仰について語り合うこともない姿、意地を張り合ってお互いに交わりを拒否している大人の信仰者の姿を見せ付けられていて、子どもたちや青年が教会に魅力を感じるわ

けがありません。青少年の信仰育成が真に課題であるのならば、大人の信仰者の根本的な反省こそ、その取り組みへの出発点となるはずです。交わりを生きているかどうか、ここでも鍵となっているのです。

さらに、小教区同士、地区との関係、地区同士の関係や教区レベルでの関わりなども、それぞれ見直していくことが必要です。

基本方針の 3 にもあるように、諸事業体、修道会などとの関係もより深いものとしていかねばなりません。お互いに尊重し合ってきたことは確かですが、相互に閉鎖的な側面を持っていたようにも思います。新たな協働へとどのように進んでいくことが出来るかは、私たちのチャレンジすべき課題です。

信者の拠点としての教会ではあっても、これからの教会はすべての人に開かれた場となっていく覚悟が必要でしょう。多くの人たちが望んでいる「出会いの場」「交わりの場」の提供は、地域社会との結びつきという課題から考えても、私たちの使命となってきます。

国際化していく日本において、外国人の信徒が増えていることは日本の国際化に率先して取り組むこととなり、民族を超えての交わりの先取りとなることでしょう。文化や国籍を超えて人間同士の交わりを生み出し、お互いの関わりが絆にまで深められていく、思えばこれは外国人宣教師がして下さったことでもあります。

「交わりの教会」への挑戦は、「交わり」の原点が三位一体の神の愛の交わりにあることを思うとき、少し想像するだけでも多くの実りを生むことになるでしょう。是非そのために皆で力を尽くしたいと望みます。

## 「共同責任」を担い合い、協働する教会へ

第二バチカン公会議の中心思想は「共同責任」であるとスーネンス枢機卿はその著『今日の教会における共同責任』の中で述べておられます。ともに協働しながら、使命を実現する責任を一緒に担っていくことが公会議後の教会の課題だという訳です。責任とは、使命の認識のことです。まず、それぞれが召された立場に応じた使命を受け止めることが第一であり、さらに相互の違い、多様性を認め合う必要もあります。その基礎には、すべてのキリスト者にとっての共通の使命である教会の使命があります。教会の普遍的な使命である福音を宣べ伝えることは、まさに共同責任であり、そのための協働がさらに意識的に行われねばなりません。

司教には司教としての責任があり、また司教団としての共同責任があります。これは司祭も信徒も同じです。個人としての責任とそれぞれの共同責任、また相互に全体としての共同責任を担っています。私たちは、協働しながら、共同責任を引き受ける共同体となることを目指します。

この共同責任の認識は教会がほんものの共同体となるための試金石です。福音宣教への取り組み、青少年の信仰育成、弱い立場に置かれている人たちとともに生きること、共同体の一致を表し、信仰の喜びを共有する典礼を行うこと、信仰を通して神とのつな

がりを深める、つまり靈性の深まりを求めること、社会に開かれた教会となること、司祭も信徒も一緒に識別しながら共同体の運営に協力することなど、多くの取り組みが共同責任の認識のもとに、協働して推進されねばなりません。

私たちは観念的にではなく、実際の生き方を通して「証し」することを求められています。神からの使命をそれぞれの人からいただいていることを認め合う「多様性の豊かさ」と、それぞれの現場に生きつつ共同責任を引き受け合う「多様性の一致」を通して、教会の証しが行われていくのです。

## 聖霊の導きを識別しながらともに歩む教会へ

私たちキリストを信じる者は、生きとし生けるものすべてが神によって創造され、人間を神との親しい交わりに招かれていることを信じています。神が人間の歴史に関わり、真に人間らしい社会を実現するように導かれていることを確信しています。それゆえ信仰者は、生き生きとした神との交わりを心から大切にします。それが靈性であり、多くの聖人が靈性に生きる道を私たちに残してくれています。それらすべての聖人は「教会の聖人」であって、彼らの遺産を狭い縄張り意識で「～会のもの」などとせず、私たちの共有財産として大切にしたいと考えます。

神の導きを求めながら歩む生き方が信仰者の生き方です。自分が自分の思い通りに自己中心的に生きて、そこに神の特別な保護を要求することは誤りです。「きょう、神の声を聴くなら、神に心を閉じてはならない」とあるように、神の呼びかけに耳を傾け、神がお望みになるように生きたいと私たちは願っています。

個人のレベルで聖霊の導きを選び取って生きるとともに、共同体としても神のお望みを識別して歩むことが必要です。個人も教会も、すべての選択や決定は靈的な識別によってなされることが基本です。

しかし一方で、そうした信仰に支えられた生き方を忘れて、社会一般での常識や回りの人々の反応に過度に気を取られてしまい、安全や保身を優先させて神を自分たちに服従させようとしてしまう過ちを犯す危険性が絶えずあります。そのようにならないために、個人や使徒職のグループにおいて、また小教区・地区・教区においても、靈的識別に生きる決意を新たにすることは欠かせません。

私たちの願いは「私の思いではなく、あなたのみ旨が成就しますように!」ということですから、社会の中で生きていくに当たって、それぞれの現場での生き方を支える識別の重要性はいくら強調してもし過ぎることはありません。

生活を「識別 派遣 現場 振り返り 新たな識別 さらなる派遣」の繰り返しに生きるように、誰もが求められています。共同体の意志決定は、共同識別によってなされることが本来であり、これからは教会での意志決定をともに識別することによって行う方向を目指します。

そのためには、主の導きを敏感に感じ取り、勇気をもってそれに従っていく訓練が必要です。信仰のさらなる深まりが課題であり、識別できる個人となることが目標になり

ます。やさしいことではありませんが、信仰の確信を支える信仰体験を掘り起こし、「あなたの信仰の上にかたく立ちなさい!」との呼びかけに信頼して進んでいくこととします。

## 司祭・修道者との協力を重視しながら、信徒の役割と責任（使命）を前面に出す教会へ

ここではまず、第二バチカン公会議が強調したことを確認します。「信徒は福音の宣布や人々の聖化に尽くすとき、また福音の精神を世間に浸透させ、その秩序を完成するように働くとき、使徒職を行う。こうして、その働きはキリストの明らかなあかしとなり、人々の救いに奉仕するものとなる」(『信徒使徒職に関する教令』2項)、また、信徒は「福音の精神に導かれて、世の聖化のために、あたかもパン種のように内部から働きかけ、こうして信仰・希望・愛の輝きをもって、特に自分の生活のあかしを通して、キリストを他の人々に現わすよう召されている」(『教会憲章』31項)と書かれており、「あかし」につながる生活を、社会の中で生きる使命を明言しています。

さらにヨハネ・パウロ2世は『信徒の召命と使命』で「これは今日、急務として感じられることですが、信徒は政治活動に密接に結びついた人間的、福音的価値のあかしをしなければなりません。それはたとえば、自由と正義、連帯、共益に対する忠実で私心のない献身、簡素な生活様式、貧しい人や弱者を優先する愛などです。……暴力と戦争、拷問とテロリズム、強制収容所、軍国主義化、軍備競争、核威嚇といった平和を否定したり危うくすることがらをまえにして、無関心であったり第三者的な傍観者ではありえません。反対に……イエス・キリストの弟子として……心からの回心と、平和を実現する基礎となる真理、自由、正義、愛のための活動を通してその任務を担うのです」(同書42項)と、信徒の社会での「あかし」が聖なる義務であることを強調しています。平和や社会正義の実現への貢献は、私たちの日常生活から始まっていきます。教育の中に見られる歪みが、学校現場で改善されてきているとどこまで言えるのでしょうか。外国人への排他性などの社会の歪みは制度的に改められていると断言できるような状況になっているのでしょうか。まだまだ真剣に取り組まなければならないことは数多くあるのです。

信徒が社会での召命を生きるためには、深い霊性と実際的な識別力を身につけていく養成が欠かせないと教皇は言われます。そしてその養成の実りは、何もかも司祭や修道者に依存する傾向が強かった過去の信徒像を根本的に変革し、「すべてのキリスト信者は、キリストにおける新生のゆえに、尊厳性においても行為においても真に平等であるから、みな、それぞれ固有の立場と任務に応じて、キリストの体の建設に協働する」(教会法208条)ための積極的な貢献に向かうことで活かされるのです。

これからの教会を考えると、カトリック信者の98%を占めるとされる信徒が、0.5%の司祭と1.5%の修道者にいつまでも依存していてよいはずがありません。小教区での主任司祭の多忙さを補うための協力や教会行事の運営、教会学校の手伝い、典礼奉仕など、いくつもの信徒による奉仕が続けられてきました。しかし、さらに大きな使命に召されていることを思うとき、教会における信徒の位置を中心的なものと考えていく必要

を感じます。

これからは「谷間に置かれている人々」を生み出し、無視し、切り捨てる社会構造自体に立ち向かっていくことが求められます。今までは概して、福祉活動的である傾向が強かったかも知れませんが。社会の仕組みとなっている悪の部分に対して、社会の真っ只中で生きている信徒の出来ること、せねばならないことはどれほどあることでしょうか。地域社会の善意の人々との協働、エキューメニカルな交わりによる協働、またそうした結びつきによってつくりあげられる共同体的拡がりを通して、一步ずつ前進していくことができるのではないのでしょうか。

小教区という社会から離れたオアシスで憩う信徒のイメージはすでに払拭されつつありますが、さらにガソリンスタンドでエネルギーを補給して社会の現場へ派遣されていく信徒像へと向かうのです。

信徒が本来の召命と使命に、今まで以上に献身する時です。もっともっと前面に出て教会活動をリードすることを望みます。そうすることで、司祭、修道者との関係や協働はさらに進み、より力強く社会に対する証しがなされていくはずです。

「新生の明日を求めて」p 47 ~ p 57 より抜粋